琉球大学学術リポジトリ

[書評] 本浜秀彦(MOTOHAMA Hidehiko)著『手塚治虫のオキナワ』

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学国際沖縄研究所
	公開日: 2016-06-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大城, 宜武, Oshiro, Yoshitake
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34045

［書　評］

本浜　秀彦（MOTOHAMA Hidehiko）著
『手塚治虫のオキナワ』

春秋社（東京）　2010 年 7 月　276 頁

大　城　冝　武（ŌSHIRO Yoshitake）

はじめに――島と顔のコスモロジー――

博覧強記が炸裂する。本書を読み解くには、まず、「あとがき」を読めばよい。「あとがき」は「おわりにかえて」と表記されている。本浜は、高揚した筆致で書く。

> 自分で言うのも何だが、私の「守備範囲」は広い。文学に関すれば、日本近代・現代文学、オキナワ文学、太平洋の島々の英文学（太平洋文学）、ニュージーランド文学などをカバーする一方、マンガはもちろん、映画、アニメ、写真、広告、演劇などの表象分析から、ポップ音楽分析、アイドル論まで、とにかく「文学」とそれに関わるあらゆるものを欲張って研究対象にしており、これまでいろいろ書いてきた。（271 頁）

本浜の論述は、広い守備範囲と汗牛充棟の書を読破したであろう実績に支えられて緻密かつ精細である。「手塚マンガの「沖縄」表象には、ひとつの題材を探るだけには止まらない、さまざまな問題系がからまっている」（12 頁）と宣言し、一見オキナワとは関係なさそうなテーマに行きつ戻りつ、寄り道をしながら、手塚治虫のオキナワに肉薄して行くのである。寄り道は、脚注として説明しうるような事どもでもある。それなりに興味深いが、本筋を錯綜させるような一面も併せ持つ。それらの問題系は、多数の仮説群を導き出す。結論風に記せば、本浜の「手塚治虫のオキナワ」は、仮説群の集積なのである。キーコンセプトは、南、海、島、身体、顔、戦争、自然、環境、動物、神の視点である。

1.　海の姉弟

本浜がまず着目するのは、1973 年に発表された沖縄を舞台とした「海の姉弟」である。その頃手塚は「沖縄海洋博覧会の展示プロデューサーに就任しており、沖縄と関わっていた。沖縄が舞台となっている。姉とその弟は父親が違う。姉は白人兵にレイプされて出来た子であり、弟は黒人兵にレイプされて出来た子である。沖縄っぽい設定である。戦争、占領、レイプ、開発、環境、差別、悲劇の種が満載である。肌の色の違い、日本人と沖縄人の顔の対比を検討しつつ、手塚の顔描画論へと誘う。そうすることで手塚というマンガ家の技量について論評するのである。作画論は、動物マンガにおける動物描写、手塚のディズニーアニメ批判などが紹介されながら、手塚治虫のオキナワというテーマに向けて収斂していく。

> 仮説 1：沖縄という場所が手塚をマンガ家としての「原点」に回帰させると同時に「復活」の足がかりを導くような確認作業を行わせた。

手塚は自らのストーリーマンガの出発点を「地底国の怪人」（1948 年）としている。
「原点回帰」は「海の姉弟」が担い、「復活」は「ブラック・ジャック」に求められる。

その頃、手塚は行き詰っていた。虫プロダクションが経営危機に陥っており、本業のマンガの人気も陰っていた。本浜は、そのような手塚が沖縄というトポスによって「復活」した、と手塚治虫論へ新しい視点を導入するのである。

2. 南の島へ

本浜は、手塚治虫の膨大な作品群の中から、沖縄が主題となる作品を拾い出している。

「イエロー・ダスト」(1972 年 7 月)、「海の姉弟」(1973 年 9 月)、「ブラック・ジャック」シリーズのうち「宝島」(1975 年 7 月)「オペの順番」(1983 年 10 月)。これらに共通なのは、発表された時期が、沖縄の施政権が米国から日本に返還された 1972 年 5 月以降になっていること、「島」がモチーフになっていることである。

本浜は、「島」の視点から手塚治虫を論ずる手法を切り開いた。少年マンガは南へ向かう。冒険譚として海や島は打って付けである。本浜は島田啓三の「冒険ダン吉」(1933–39 年) を取り上げ、手塚治虫の島田観を検討している。手塚治虫が「ダン吉」の表現を肯定的に捉えていることを指摘し、批判する。島田が「蛮公」とされる現地人をステレオタイプに描いていることに対して「人種偏見だと指摘されていることを否定し」(97 頁)、手塚自身も「新宝島」や「ジャングル大帝」で同様な描写をしていた。本浜は「人間の「肌」の色というものに対して、手塚は、島田と同じく、やや無神経だと言わざるを得ない」(98 頁) と指摘している。しかし、本浜の眼差しは温かい。

> もちろん、人のデフォルメは、マンガにとって重要な要素である。また、おそらく手塚も、南の島の人々に対して、決して悪意はなかったに違いない。しかし、その無神経さは、決して肯定されるべきものではない。そのようなステレオタイプの問題を生み出しながら、同時に現在のすべてを投げうって平和のために命をかける主人公を描いた作品を、他のメディアに先駆けて、しかも少年向けにマンガで描いた手塚だからこそ、マンガという表現がより優れたものになるために、その批判を受けるべきである。(99–100 頁)

「南」や「島」のコンセプトには、2 項対立の図式が立ち現れる。文明―未開の対立、支配―服従の対立、日本―沖縄、日本―米国、沖縄―米国、等々。「ダン吉」は、日本が南洋諸島を信託統治している時期の作品として、意気軒昂である。島を統治するダン吉、蛮公を教化するダン吉。ジャングルに平和をもたらすジャングル大帝レオ。本浜は、レオを文明でも未開でもない中間項ないし媒介項として位置づける。沖縄に視点を戻せば、沖縄は南であり、島である故、定めし未開であろう。日本―米国の対立では、沖縄が中間媒介項であろう。日本や米国は沖縄にパターナリズム的に振る舞う。保護者であり、厳格な父である。

3. 沖縄に無関心な日本

手塚は、沖縄の施政権返還前の 1966 年に、南の島の新聞『琉球新報』のインタビューを受ける。本浜はこの記事を紹介して、「手塚の発言は、沖縄の基地問題が、「本土」で関心を持たれていないことへの憤り、沖縄の復帰運動へのエール、そして復帰後の沖縄に対する日本側の姿勢についての注文という内容である」(131 頁) とまとめている。手塚のこの先見性に驚く。その後の沖縄の状況は、手塚の危惧を回避しえていない。このインタビュー記事の中で、手塚は「どんぐり行進曲」という漫画で、沖縄に触れたとしている。この時点で、手塚は沖縄を訪れていないだろうし、本作は沖縄が主題ではない。記憶違いなのか。本浜は、その解を本作の連載第 1 回の扉絵に求めている。「どんぐり」とは、爆弾の隠喩であると設定されている (133 頁)。本作には、戦国武

将の名を冠されたキャラクターが多数登場する。

仮説 2：手塚治虫は、戦国武将たちをモデルにしたキャラクターに託して、子どもたちに、日本が取らなくてはならない外交や政治、平和のあり方を描いている。
仮説 3：「戦後」、そして「戦後」をもたらした「戦争」という問題に連なる意識や関心の先に、手塚治虫にとっての「沖縄」がある。

4. 手塚治虫の沖縄行

本浜は、手塚治虫が「少なくとも 7 回、仕事や家族旅行で沖縄を訪れている」（160 頁）と述べる。そうした上で次のような推測を述べている。

> もしかすると「イエロー・ダスト」を描く前に、非公式な打診を受けた手塚が、復帰直後の沖縄を訪問し、その際に、海洋博開場予定地に加えて、海軍壕を訪れた可能性は否定できない。（160 頁）

「イエロー・ダスト」で 3 人の沖縄青年たちが米人の子供たち 23 人と女教師を誘拐し立て籠もる場所が「海軍壕」であり、その内部が詳細に描写されていることからの推測である。
では、誰が手塚を海軍壕に案内したのであろうか。
渡嘉敷唯夫（1976）は、手塚治虫の追悼文の中で「復帰直前（1971 年）漫画集団の一員として沖縄訪問以来、計 4 回も沖縄を訪れている」「手塚さんは余暇には必ず沖縄を訪れていた」と記している。渡嘉敷が案内した可能性も考えられる。渡嘉敷がこの追悼文の中で、手塚が日本漫画家協会沖縄支部結成に尽力した事を記録していることを追記しておこう。ここにも手塚治虫のオキナワがある。
「イエロー・ダスト」に対する本浜の評価は高い。

> ベトナムと沖縄という空間的には離れた 2 つの場所が、実はアメリカの「戦争」で繋がっていることを手塚はマンガという表現で鮮やかに浮かび上がらせた。こうした手塚の問題意識は、同じく沖縄を舞台にした「海の姉弟」にも見られるものである。（159 頁）

> この作品の最後には、青年たちの犯行に衝撃を受け、弔慰金を持ってワシントンに飛んだ日本の年老いた小柄な外相が、大柄な米国の政府関係者と、平身低頭で握手をしているコマが描かれている。そこでは、アイロニー、あるいは悲劇的な滑稽さを、沖縄の戦後の米軍基地をめぐって繰り返し起こってきたことの本質を抽出して鋭く描いている。〈中略〉こうしたきわめて高度な、しかも批判力を持った表現は、誰にもいまだ真似できていない、手塚の圧倒的なマンガ力によるものである。（159–160 頁）。

ところで、米軍の決死隊が突入して目にしたものは子ども達の死体の山だった。子ども達を殺戮したのは、引率の米人女教師であった。米軍がベトナム戦争で使用した戦意高揚薬が混入された糧食を全員が食し狂気におそわれていたからである。なんというアイロニー。

5. 沖縄の墓制

本浜は、手塚治虫における「地図」論を展開し、島論に厚みを加える。海と島が冒険譚を超え、海と島と自然環境を視野に捉えた点に言及している。それはまた、死者とのコミュニケーションを導くものとなる。「ブラック・ジャック」シリーズに、「宝島」がある。沖縄のある小島に、か

つてブラック・ジャックの下にいたとされる看護婦「五條ミナ」が眠る亀甲墓がある。「五條ミナ」の姓名を本浜は次のように読み解く。

> 「グソー」（漢字を当てると「後世」=「あの世」）を五條とし、「見なさい」を「ミナ（見な）としたのではないか。（216 頁）

これも、仮説群のひとつである。「グソー」は「後生」= あの世、来世ではないか。そうすると「グソー」から「五條」には、距離がありそうである。

仮説 4：手塚治虫は沖縄戦の数々の慰霊碑が多くある沖縄で「死者」とのコミュニケーションの視点を得た。

手塚の描く亀甲墓は奇妙である。見なれた沖縄の墓の景色と微妙に異なる。典型例と異なる。違和感を覚える。本浜は「亀甲墓を、その形の曲線を強調するような線で丁寧に描いていることにも注意が必要である。」（218 頁）と注意を喚起しているが、墓の亀甲部分が妊婦のお腹のように張っていることの表象的解釈が欲しい所だ。

> 手塚は繰り返し「島」を描いているが、手塚自身は、決して「島」側のポジションには立っておらず「島」を「内」から描いたわけではない。（89 頁）

仮説 5：手塚治虫にとって、「他者」である島は、手塚自身の内にある「本土」が投げかけた一種の投影図であり、島を解釈し支配しようとする本土の意思表明である。
本土とは中心であり、島は周縁である。

6. 自然保護と開発

本浜は、「ブラック・ジャック」シリーズの、結果として最後の作品になったのが「オペの順番」であるという。イリオモテヤマネコを主人公に、「ジャングル大帝」とは異なる人語を話さぬ動物が描かれている。船中での出来事、密猟者が持ち込んだ天然記念物のイリオモテヤマネコが逃げ出し、赤ん坊を噛み、猫を狙う手元が狂い代議士に弾が当たる。鉄砲が命中しネコは重傷を負う。これら三者の手術の順番をめぐり、ブラック・ジャックは、トラブルに巻き込まれる。手術は、猫、赤ん坊、代議士の順で実施された。これを不服とした開発計画推進の急先鋒の代議士は裁判に持ち込む。無免許医師のブラック・ジャックは苦境に陥る。代議士の治療中ジャックは、癌を発見していた。裁判を取り下げること、開発計画を白紙に戻すこと、を条件にジャックは代議士の手術をおこなった。ブラック・ジャック = 手塚治虫は、命に関して動物と人間の区別をしない。命と自然環境保護の姿勢が顕著である。

本浜は、「沖縄の環境問題については、「海の姉弟」以降、沖縄を描いたマンガの中で、手塚が見出したテーマでもある」（228 頁）と述べている。「海の姉妹」「宝島」「オペの順番」を少年誌に掲載された「沖縄三部作」と呼び、これら作品に共通なのは自然保護と開発の 2 項対立の構図の中で物語が構成されている点である、とする

おわりに

本浜は、手塚治虫研究に、島概念と顔概念を導入することにより新しい手塚像を示している。「手塚治虫のオキナワ」としながら、この主題への言及はそれ程多くはない。沖縄と関わることで手塚は、創作者としての自己を発見し沖縄その他のテーマをより具体的なものにしていったもの

と考えられる。端的に言えば、これが本浜の提出した知見であろう。しかし、本書の価値はそこにはない、と言ってしまおう。本書は手塚治虫のマンガ思想とマンガ表現に関する理論書と読める。本書は手塚論を超えたマンガ原論となっている。

本浜は、動物マンガについて検討する中で次のように記している。

> 「ジャングル大帝」の構想のスケールの大きさ、完成度の高さは群を抜いている。加えて、手塚マンガが「ジャングル大帝」ほど見事に凝縮され、明確に示され、しかも描き切られた作品はほかにはないのである。(241 頁)

小説において、作家は一人称小説や私小説でもない限り神の視点から叙述していく。三人称の語りである。すなわち、作家は、小説(物語)全体を支配する。マンガではどうか。本浜は次のような仮説を提示する。(253 頁)

> 小説でいう三人称的なもののマンガでの表出は、キャラクターの顔に集中している。

この仮説は、「マンガでは「顔」が物語る」、と言い換えられる。さらに、「変化していくキャラクターの顔は、すなわち物語の時間の流れを表現することにほかならないのである」(255 頁)とも説明される。

本浜のこの到達点こそ、マンガ表現理論のパラダイム転換を突き動かす梃子である。

本浜は、かつて漫画家になることを夢見た。峠あかねのペンネームでマンガ評論を重ねた真崎・守は、高じて漫画家となった。矢口高雄は、銀行員を辞めて漫画家になった。わたせせいぞうは、サラリーマンを辞め漫画家になった。われわれは、本浜のマンガが読めるようになるのだろうか?

附記:誤植と思われる個所があるので、指摘しておく。
204 頁 5 行から 6 行の文の繋がり「まさ/この地図に誘われて」
233 頁 4 行「親切丁寧」通常は「懇切丁寧」では?
247 頁「生きとし、行けるもの」は「生きとし、生けるもの」

参考文献

本浜秀彦(2010)『手塚治虫のオキナワ』春秋社、東京。
渡嘉敷唯夫(1989)「手塚治虫さんの思い出」『沖縄タイムス』2 月 25 日、沖縄。

手塚治虫参考作品
「どんぐり行進曲」(1959 年『少年クラブ』)(手塚治虫漫画全集 379)
「イエロー・ダスト」(1972 年 7 月『ヤングコミック』)(手塚治虫漫画全集 261)
「海の姉弟」(1973 年 9 月『少年チャンピオン』)(手塚治虫漫画全集 126)
「宝島」(1975 年 7 月『少年チャンピオン』)(手塚治虫漫画全集 157)
「オペの順番」(1983 年『少年チャンピオン』)(手塚治虫漫画全集 371)
(以上、講談社、東京)

(沖縄キリスト教学院大学)